

2026年度漢文夏期集中コース報告

大 竹 弘 子

1 はじめに

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターでは、40週間のレギュラーコースとは独立して漢文夏期集中コース（以下漢文コース）を設置しており、2026年6月19日（金）より7月9日（木）まで実施した。

漢文はレギュラーコースでも、プログラム後期において「選択C」として週1回の授業を実施している。しかし、レギュラーコースには参加できないが、研究上、漢文読解を必要としている大学院生、研究者等が想定されることから、日本人が書いた漢文を中心に、漢文の基本構造習得・読解に集中したコースを設けている。

2 漢文コースの目的と特徴

このコースは、対象として、主に資料として漢文、あるいは訓読文の文章を読むことが必要な歴史学、文学、人類学、宗教研究、美術史等の分野の大学院生、研究者を想定している。漢文読解の必要はあっても、漢文基礎の学習機会が少ないことから、基礎となる構文、旧漢字、漢文訓読体、候文などを集中的に学習し、その構造知識をもとに実際の文章を読み、和製漢文の文体・特徴に慣れ、以後の研究に資することを目的としている。

受講者には次の要件を満たすよう求めている。

1. 漢文読解能力を必要とする専門的または学術的分野への従事を目指していること
2. 上級レベルの日本語能力、および文語文法の知識を有すること
3. 日本語の基礎的文法・文型を十分に理解し、ひらがな、カタカナに加え、漢字約1000字以上の読み書きを既に習得していること

3 受講生の構成

今年度は博士課程3名、学部生1名の4名が受講した。専門分野は、近世史、近代文学で、研究において、漢文あるいは訓読文で書かれた資料の読解・理解を必要としている。研究対象、読むべき資料が固まっている受講者、模索中の受講者と分かれていた。また、漢文知識については差があり、3名は未習、1名はある程度知識があった。

4 教育活動の詳細

4-1 今年度の期間・授業時間

今年度は対面授業で一日4コマの構成、期間を三週間とし、月～金曜日午前に構文の授業、月～木曜日午後に読解の授業を実施した。

4-2 授業の枠組み

4-2-1 時間割・カリキュラム

第一日目、オリエンテーションでは、受講生の専門分野、漢文に関する知識を把握するとともに、このコースで扱う「漢文」とはどのようなものか、漢文訓読の際にはどのような提示法が用いられているかを説明した。

以降の時間割は、50分授業4コマの構成で、うち2コマを午前10時00分から午前11時50分までの間に行い、昼休みを挟んで2コマを午後1時30分から午後3時20分に行なった。

午前の2コマは第二週まで、漢文の構文構造を中心に、単純なものから複雑なものへの積み上げとともに多数の例文を自力で読み解いていく練習を重ねた。今年度は受講生の漢字知識、日本語知識の差がそれほど大きくなく、漢字知識のレベルも高いと判断したことから、構造を説明する例文は単純なものは白文、複雑になるに従って返り点付きで提示した。練習文・課題文は、基本的に白文、または返り点のみ付したものを提示し、複雑な構文は一部を白文、その他は返り点のみ、あるいは返り点・送り仮名付きを用いた。

例年に比して白文の割合を高くすることで、説明例文で得た知識を応用していく力を付けることを目指した。また、新たに白文に自身で返り点を付ける練習を三回実施し、構文知識と訓読・意味内容を一致させていくことを目指した。

午後の2コマはまとまった文章の読解を行った。第一週目は近代の漢文訓読体の文章を取り上げ、そのスタイルや旧漢字、旧仮名遣いに慣れることを目指した。二週目以降は、まず『論語』等の中国古典、次いで『日本外史』等の和製漢文からまとまった内容のある短い文章を選び、返り点、送り仮名を付けた形で提示した。授業では、まず著者、題名、歴史的背景などの情報を共有してから、午前の授業で得た構文の知識を活用し、辞書を駆使して、各自自力で読解を試みる。ある程度進んだところで、クラス全体で読み方と意味を確認し、重要な語彙・表現を指摘して覚えるよう促した。同時に、内容の理解に必要な背景知識を得る手段、様々なリソースについても情報を共有した。

第三週午前は「候文」を扱い、実際の候文による近世資料の読解も行った。第三週午後は、一次史料読解の経験として、また、様々な文体・内容の漢文に触れておくことを目指し、受講生の選んだ研究資料から一部分を選び、全員で読解を試みた。取り上げたのは、・森鷗外「舞姫」『国民之友』第69号明治23年（1890年）1月版

- ・「五五三六 寛政十一未年六月三奉行え」
高柳真三、石井良助 編『御触書天保集成』下、岩波書店、1958
 - ・「弘道館記」
『弘道館ホームページ』
<https://acrobat.adobe.com/id/urn:aaid:sc:AP:e711a3e9-5c5c-420d-aac8-7f700aab1bba>
 - ・藤田東湖『弘道館記述義』光霽楼、慶応2年（1866年）
 - ・景戒『日本国現報善悪霊異記』（日本霊異記）より「捉雷縁第一」
狩谷桭斎ほか『校本日本霊異記・日本霊異記攷証・京游筆記』（覆刻日本古典全集）、現代思潮社、1978
- である。

4-2-2 電子辞書の活用

「漢字辞典・国語辞典に関する指導・情報検索方法の指導」の必要性に鑑み、電子辞書を持たない受講生に電子辞書を貸与し、使用法を指導しつつ辞書情報に対する知識を得させた。また、授業内でも、「今必要な情報を得るためどの辞書を引くか、情報を得るためにどのような検索方法があるか」について意識させ、どのように調べれば求めている情報にたどり着けるか判断できるよう指導した。受講生が実際にアクセスできる辞書等は形式・用語など様々で、それぞれの辞書から得られる情報を整理し用語に慣れるためである。具体的には、

- ① 漢字の基本情報にはどのようなものが提示されているか
- ② 字義はどのような階層性をもって並べられているか
- ③ 助字・句法・語法・日本語固有の使用法について、どこにどのような項目として提示されているか
- ④ 漢字辞典と国語辞典の提示情報の違いを理解し、求める情報はどちらにあるか
- ⑤ 辞書を対照しながら目的の情報を求め、確認していく手順
- ⑥ 漢字辞典・国語辞典で求める情報が得られない場合、どう情報を求めるか

以上の点を中心に、全員で同じ漢字・語彙を調べながら確認させた。今年度は受講生の習熟度が非常に高く、プログラム後半では情報獲得がかなり早くなった。

4-2-3 教材配布

教材はハードコピーの形で当日受講生に配布し、授業を受けながら書き込んでいく形式を取った。その上で授業後の復習・課題を行うためGoogleドライブによる教材シェアを行った。

4-2-4 個人ノート

受講生の構文・読解のプロセスを共有するためGoogleドキュメントの形で受講生の個人ノートを設定して講師と共有し、授業中の個々の読み、また、課題とした練習文読み下しを書き込むこととした。授業中には講師がそれぞれの誤りをその場で指摘し、課題の場合は次の授業までに誤りが指摘された。受講生はそれぞれ指摘を見て訂正した。具体的には、受講生一人一人が自分のドキュメントファイルあるいはハードコピーに読み下しなどを書き込む、講師は受講生の書き込んでいく内容を見て訂正すべき部分を直接、あるいはドキュメント上で赤字・コメントなど書き入れ指摘する、受講生は指摘された誤りを自分で訂正してみるという流れである。

5 受講生のコースに対する評価・意見

コース終了時に受講生に対しGoogleフォームによるアンケートを行い、回答を得た。コース全体に対する評価はExcellent3名、Good1名であった。課題に関しては、練習の量をもっと増やしてほしいという意見があった。

このプログラムは三週間という短期の中でできるだけ広範囲に資料を読むための基礎知識習得を目指すので、一つ一つの項目にかかる時間は短くなるが、今年度は受講者の習得が早く、受講者によっては課題の量にやや物足りなさを感じていたようである。年ごとに受講者の力が異なるため、常に新たな方式・課題を加えていけるわけではないが、できる範囲で内容・量の調整を考える必要があるだろう。

6 おわりに

本コースでは「受講生の知識・理解に応じて、課題を調整し、個別に指導する」ことを目指し、語彙力、漢字力、日本語力の個々の差を踏まえながら調整を行っている。今年度は各受講生に日本語力・漢字知識・歴史知識・文化知識の点でそれぞれ強みがあり、互いに補い合って進めることができ、また、新たに自分で返り点を付ける練習を取り入れることもできた。そして、受講者全員が熱心に取り組み、全ての課題を高いレベルでこなした。来年度以降も受講生からの意見を踏まえつつ、可能な工夫を探っていきたい。また、アンケートからは受講者が学習成果を実感していることがうかがわれた。本コースの成果と受け止めている。

(おおたけ ひろこ／2026年度漢文夏期集中コース主任)